

日本のドイツ語教育における 音声指導の実態と問題点

2008年9月20日 大阪言語研究会

慶應義塾大学

境 一三

目次

- 日本のドイツ語教育における音声指導の実態
- 音を先に提示する試み
 - ギョエテとは俺のことかと...
- ドイツのDaF(教科書)の変遷
- なぜ音声訓練が必要か
- 日本のドイツ語教育における問題点
- 日本の現場で何が教えられるべきか
- 日本におけるドイツ語教育研究の貧弱さ
- 日本におけるドイツ語教員養成の問題

日本のドイツ語教育における 音声指導の実態

- 文法訳読教育では音声指導はほとんど行われてこなかった。
- 文法教科書の最初にある、綴りと発音の関係を表す表のみ。
- 実例：綴りを先に示し、発音と例を後に
ä ([アー]や[ア]としないように)
Träne 涙 Bären 熊 fällt 落ちる Hände 手(複数形)
ei [アイ]
Ei 卵 Leiter リーダー Meinung 意見 nein いいえ

音を先に提示する試み

- 音を提示してからそれに対応するつづりを表示する
(境 1999f.: 「ドイツ語発音・聴き取りレッスン」『基礎ドイツ語』; 新倉・Lipsky 2005: 『ドイツ語発音聞き取りトレーニングブック』)
- 知らない音を聴いて書く 言語音の捉え方を意識
一般化していない
- 総合的な音声訓練書: E. Stock & U. Hirschfeld
1996: *Phonothek, Arbeitsbuch*: 音の提示が先

ギョエテとは俺のことかと...

- Öは「エー」か？
- 語尾 -e, -er は聞き分けられているか？
- 語尾 -m, -n は聞き分けられているか？
- 聞き分けは文法意識とともに
 - 違う音だから異なった機能を担っている
 - eine / einer; dem / den etc.

ドイツのDaF(教科書)の変遷

- W. Viëtor : „Der Sprachunterricht muß umkehren“ (1882) 音声を中心に据える
- 文法訳読、DM、ALM・AVMを経て
- 1980年代以降、Communicative Approachの影響により、音声訓練が継子扱いされた。(cf. U. Hirschfeld)
- 文法 > 語彙 > 音声
- 90年の東西ドイツ統合以降、西ドイツの教材開発に東ドイツ(Herder Institut)の音声教育の影響が見られるようになり、大手出版社の教材に音声に関する練習問題が増えた。

なぜ音声訓練が必要か

- 一般的母語話者は非母語話者の言語能力をまず発音で判断する(文法や語彙選択の正確さは二の次)
- 発音は社会的ステータスの認知と密接に結びつく
DaZ研究の成果
- 発音能力と聴き取り能力の関係？
- 発音能力と読解能力(スピードと正確さ)の関係？

日本のドイツ語教育における問題点

- 伝統的に文法訳読の教育
- 「ドイツ語はローマ字読み」
- 安易な導入教育により音声に対するAwarenessを高めることを怠ってきた
- 文法 > 語彙 > 音声
- ALMもそれほど大きな影響力を持たなかった
- 文法訳読もCAも音声を継子扱い
- ドイツで出版される新しい教科書を採用する(日本人)教員が少ない

日本の現場で何が教えられるべきか

- 言語音声一般に対する意識の向上 調音器官の観察、母語の調音の観察
- segmental suprasegmental レベルの発音指導
- まずアクセント(語、文)、リズムパターン
- まとまった分量の文章を「らしく」朗読できるか
- akzentzählende Sprache の意識
- スピード

日本におけるドイツ語教育研究の貧弱さ

- 英語教育に比してドイツ語教育の研究は極めて貧弱
- 音声教育に関しては、実証的研究はほとんど行われていない
- 音声学ではなく音声教育の研究振興が急務

日本におけるドイツ語教員養成の問題

- 日本ではドイツ語教員の養成は(一部の例外を除いて)事実上行われていない
- 現場の教員のほとんどが音声訓練を受けていない
- 現場の教員のほとんどが音声指導の訓練を受けていない

Danke schön!

skazumi@hc.cc.keio.ac.jp

<http://web.hc.keio.ac.jp/~skazumi/>